# 定住するノマド、揺れる境界

ハイパー車上クリエイター /Address Hopper Inc. 代表 / 京都大学建築学科 准教授

## 渡鳥ジョニー / 市橋正太郎 / 柳沢究　鼎談企画

Jonny WATARIDORI / Shotaro ICHIHASHI / Kiwamu YANAGISAWA

永田町で都市型バンライフを実践する渡鳥ジョニー氏、アドレスホッピングを提唱し自らも実践する市橋正太郎氏、彼らは非定住の暮らしを実践しながら新たな住環境の開拓に積極的に取り組んでいる。これまで、ノマドという言葉は主に「現代の遊牧民」と訳され、定住生活と対置されてきた。しかし、そもそも定住と非定住の生活は区別できるものなのだろうか。私たちのほとんどはライフステージに合わせて引っ越し、旅行にもいく。本鼎談では、技術の進歩や社会の変化が私たちの暮らしや価値観までも変化させている現代において、人間生活が本来含んでいる移動的要素と生活のありかたについて再考する。実際に非定住生活者として生活するお二方に加え、住経験の研究者で建築家でもある柳沢究准教授を交え、「定住と非定住の境界」というテーマで話をしていただいた。

進行＝宇野亜実、高橋温、野村祐司、若松晃平
2022.9.19　京都大学桂キャンパス大会議室にて

### バンライフと場づくり

――はじめにそれぞれが力を入れているプロジェクトを具体的にお聞きしていければと思います。渡鳥ジョニーさんから自身の活動の紹介をお願いします。

**渡鳥**　僕は家を捨て自作のキャンピングカーで暮らす、いわゆるバンライフという生活をしていました。2014 年のフォスターハンティントンという方の『HOME IS WHERE YOU PARK IT[1]』という写真集には大きく影響を受けました。この書籍がきっかけで海外の若者がバンライフをまねしだしたんですけど、その様子が SNS にあがってきて僕も見る

1　フォスターハンティントンはワシントン州スカマニア郡出身の写真家、映像作家。ラルフローレンのコンセプトデザイナーや出版社で働いていた。2011 年にファッション業を離れ、生活に必要最小限のモノを VAN に入れ旅を始める。2014 年、バンライフを収めた写真集『HOME IS WHERE YOU PARK IT』を出版。
2　株式会社 LIFULL が 2019 年 7 月よりサービスを開始した、自宅やオフィス等、場所に縛られないライフスタイル「LivingAnywhere」を実践することを目的としたコミュニティ。コミュニティメンバーになることで、複数拠点に展開する LAC を「共有して所有」し、全国の拠点を好きな時に利用することができる。

ようになりました。当時は札幌に住まいがあり家族との生活も落ち着いていたのですが、その後突然離婚することになり 10 年ぶりくらいに東京に戻ってきたのです。そこでは相変わらず、満員電車の辛さとか、狭い住宅環境だとか、リビングコストの高さなど、人を幸せにするはずの住まいが逆にそれを阻んでいるように感じた一方、シェアハウスやコワーキングスペースなどシェアリングエコノミーが出始めてきていて、今だったらどのような都市の使い方ができるかを考えるようになりました。そして、必要最小限のプライベート空間である車と都市全体をシェア空間と見立てて東京をハックすれば豊かに暮らせるんじゃないかという仮説の元に、永田町の一等地でホームレス、いや、都市型バンライフを始めました。

そこでは車中泊のしんどさは排除して、いかに 3 畳の空間を住宅に近づけるかを徹底的に考え抜きました。具体的には、立って歩けるほどの高さにし、ベッドや机を収納式にするなどスペースを有効活用しました。とはいえ 24 時間車の中にいるのは流石に苦痛なので、日中はオフィスで仕事をし、お風呂は近くのジムに通い、寝る時だけ車に戻るという生活を始めました。実際に暮らし始めると最小限のパーソナルスペースとしての Van と、LDK などそれ以外の空間や設備はシェアすることで、1LDK や 2LDK を借りなくても、VLDK で豊かに暮らせることがわかりました。

永田町での都市型バンライフ
後ろの建物を丸ごとシェアして生活していた

そして神戸、横浜、長野などいろんな場所で VLDK 生活を実践し、その良さについて確信を得ることができたのですが、車を停められるシェア施設が少ないと感じていたので、次は車両だけでなくそれを囲う場づくりもやりたいと思っていました。その時にその両方が実現できそうな八ヶ岳（LivingAnywhere Commons[2]）のプロジェクトから声がかかり、場づくりの実験を始めました。

LivingAnywhere Commons 八ヶ岳北杜内に展開する
オフグリッドの実験場 [3]

今進めているのが、オフグリッド [4] の製品開発です。電線も水道も繋がっていない環境で、文化的な生活ができるかという実証実験をやっています。最終的なゴールはインフラがないような荒野でもエネルギーに困らずに生活ができるようなオフグリッド居住パッケージの開発です。

**柳沢**　お話を伺う前までは、バンライフは移動と不可分なものなのかと思っていました。しかし今の話を聞いてると、最も合理的な生活空間を求めて家を作ろうとしたら車になって、結果として移動するオプションもついてきたということが分かり、なるほどなと。そしてそれが現在の都市の成熟したインフラにちゃんと乗っていて、非常に鮮やかだなと思いました。さらに、そのインフラからも抜け出そうとオフグリッドにチャレンジされているというのは、非常に納得できる道筋です。単純な質問なんですけど、どれくらいの頻度で移動されているんですか。

3　オフグリッド・リビングラボ八ヶ岳全景。2023 年 2 月より、アウトドアホテル「TENAR」と共同でオフグリッド生活を体験できる宿泊サービスを開始。
4　電力、ガス、水道など生活に必要なライフラインの一つ、または、それ以上を公共のインフラストラクチャーに依存せず、独立して確保できるよう設計された建物の特徴やその生活様式。

**渡鳥**　実のところ僕は移動するのが嫌いなんですよ(笑)。金銭的にも時間的にもコストがかかるのでなるべく移動は最小限にして、1回移動したら1ヶ月から半年ぐらい同じ場所に留まり、そこを拠点に小旅行に行くスタイルでやっています。

**柳沢**　思ったより移動してないですね。

**渡鳥**　そうですね。毎日移動してた時期もあるんですけど、すごく疲れてしまいました。それに気に入った場所を見つけたらそこにしばらく定着したいという気持ちもありますね。

## アドレスホッピング―様々な地域での暮らしと仕事―

――続いて市橋さんのプロジェクトをお願いします。

**市橋**　僕は移動を中心にした非定住の暮らしを約5年続けていますが、その生活を「アドレスホッピング」と呼んでます。ノマドも似た意味を指しますが、僕が活動を始めた時、日本の社会ではノマドという単語はスターバックスでPC作業をするようなような、働き方の文脈で使われていました。でも僕は、場所、家、あるいは所有などの概念から離れたときに、様々な地域の暮らしや面白さ、いろいろな人や文化との出会いがあるという面を伝えたかったんです。そこで半年ぐらい考えて「アドレスホッピング」という呼び方にしました。

アドレスホッパーとして自分の活動を発信し続けていたら、現在の状況に不満を抱えた仲間が集まってきました。彼らは移動生活や家に住まない生活、あるいはシェアリングエコノミー[5]の中での生活など、自分なりに社会実験・生活実験をしてるつもりだけど、社会からは異端者として扱われた人たちでした。そうしてアドレスホッパーのコミュニティができ、さらには皆でいろいろな地方を巡る中で、よりたくさんの仲間もできました。これらが最初の2年間のハイライトですね。

5　一般の消費者がモノや場所、スキルなどを必要な人に提供したり、共有したりする新しい経済の動きや、そうした形態のサービス。
6　Address Hopper Inc. 2020『Hopping Magazine』

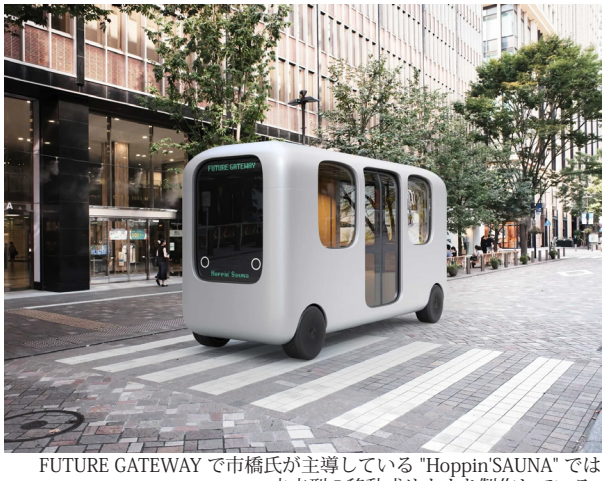
その後手掛けた仕事が『Hopping Magazine[6]』です。当時、スタートアップ企業や大手不動産系の会社が新しい居住サービスをつくる動きが出てきていました。そのなかで、僕がやるなら物理的なインフラじゃなくて、文化的なインフラをつくるべきなのではないかと思って、『Hopping Magazine』という雑誌を作り、アドレスホッパーの文化を明示していく活動をしていました。

そうした活動のなかで出会いやきっかけがあって５年間で様々なことに関わりました。一つは、アフリカのマサイ族の村での２週間のホームステイと水インフラの開発です。その村はサバンナのど真ん中にあるのですが、4G の電波が飛んでいて、皆スマホで YouTube をかけながら踊ったりしているのに、上下水道の設備インフラが全く整備されていなかったことにとても驚いたんです。その頃に偶然、水循環の設備インフラを開発しているスタートアップに出会い、これがアフリカの村にあれば長期間でも問題なく暮らすことができるのではないかと思って、２年ほどお手伝いをしてました。

アフリカでの生活

もう一つ、KDDI 総合研究所と一緒に『FUTURE GATEWAY[7]』という枠組みを運営しています。ジョニーさんにも以前ワークショップに参加してもらったんですが、新しい暮らしや生活を先取りして実験してるような人たちを「先進生活者（＝ t'runner）」と呼んで、そういう人たちと一緒に未来のライフスタイルを一般化する活動をしています。例えば、移動式サウナや未来のゴミ捨て場など、様々なプロジェクトが動いています。

最初の２年間は海外にもよく行っていましたが、2020 年以降はコロナ禍の影響で移動しづらくなりました。そんな時に妻と出会い、結婚したんです。これを機に、それまでの一人で自由に移動するスタイルから、一つの地域に数ヶ月滞在する、そんな移動スタイルに切り替えました。そこから２年経って、親の介護や子供の出産があり、またライフステージが変わったことで、京都、左京区浄土寺に一旦落ち着いています。すごく居心地がいい地域で、子どもが大きくなるまで、一つの拠点にしたいと考えています。



FUTURE GATEWAY で市橋氏が主導している "Hoppin'SAUNA" では未来型の移動式サウナを製作している。

**柳沢**　アドレスホッピングを始めた最初の頃は相当な頻度で移動して回っていたのでしょうか。移動生活の様子があまり具体的に想像できていないので、例えば、ある１年間ではどういう動きをどれくらいの期間でされていたのか教えていただけますか。

**市橋**　月に平均４から８都市を巡っていました。例えば 2019 年の年末は、スペインのサンセバスチャンでお腹いっぱい美食を堪能した後、翌週にはケニアに飛んでスラム街の視察をしたり、タンザニアでサファリを見に行きました。３週間ほどアフリカに滞在した後、帰国してすぐに福岡から長崎までサウナ巡りをするツアーを敢行して、その後、関わりのある秋田県大館市に移動して自治体の人たちと地

7　FUTURE GATEWAY は、ニューノーマル時代のライフスタイル提案に関した取り組みを行う KDDI 総合研究所の研究拠点「KDDI research atelier」と、先進的なライフスタイルを取り入れている個人、一連の取り組みに賛同する KDDI のパートナー企業の３者を基盤とする共創プロジェクト。

域創生の議論をし、すぐ東京に戻ってマガジンのリリースパーティを開催しました。これが１ヶ月から２ヶ月間の話ですね。

**柳沢**　めちゃくちゃ移動してますね。

**市橋**　めちゃくちゃしてました (笑)。

**柳沢**　例えば１週間の中で仕事してる日と、観光する日があると思うのですが、この２つは週にどのくらいあったんですか。

**市橋**　場所によりますが、半々ぐらいです。大体午前にまとめてミーティング入れておいて、空いた時間で散策したり、地元のごはん屋さんに行ったりしてました。でも、あまり観光という観光はしないんですよ。行った土地にはそこに住んでる感覚でいたいので、地元の人が行っている店とかに行って、隣で出会った地元の方と乾杯して二軒目に行ったりしてました。なのでその土地で自由に過ごす時間はあったんですけど、観光したという記憶はないですね。

**柳沢**　延々とワーケーションが続いてるみたいですね。

**市橋**　今風に言うとそうかもしれないです。仕事とプライベートの境目が全くないんです。

**柳沢**　移動生活の中では基本リモートでの仕事が多いと思うのですが、具体的にはどういう仕事を受けられるんですか。

**市橋**　活動を始める前まではマーケティングや新規事業の立ち上げをやっていたので、その経験を生かしたいわゆるコンサルティングの仕事が多いですね。それを完全にリモートでやってます。先ほどの『FUTURE GATEWAY』もKDDI 総合研究所からそういう枠組みをつくりたいと相談を受けたのでそのつくり方のサポートをしていました。

**柳沢**　クライアントは日本の会社が多いと思うのですが、日本の会社の企業戦略をアフリカで考えていたら、その内容にも変化が出てきそうですね。私は建築の設計も時々するんですけど、日本の家を海外に滞在しながら設計していたら、絶対その場所からの影響が設計の内容に反映されると思います。各地を移動しながら仕事をしていると、自分の仕事の幅や内容にもポジティブな効果がありそうだなと思いました。

**市橋**　それは大いにありますね。今もそれを感じていて、京都に住み始めてから、土地柄なのか、表現活動をしたい気持ちが強くなってきたんです。京都には親の介護をきっかけに拠点を構えたんですが、仕事を一旦整理したこともあって、稼ぐための仕事じゃなくて自己表現のための仕事や、社会や地域のための仕事しかやらないって決めたんです。なので、これからどうなるのか、自分自身とても楽しみなんです。妻には迷惑をかけるかもしれませんが (笑)。

## 住経験と移動生活

――最後に柳沢先生のプロジェクト、研究の紹介をお願いします。

**柳沢**　今、重点的に取り組んでいるのは住経験の研究です[8]。例えばこれから家を建てようというときに、子どもの頃からいろいろな家を転々としてきた人と、ずっと実家暮らししてきた人では、つくりたい家は当然違う家になるのではないかというような話です。それは家に求める条件が違うということもあるだろうし、空間の感じ方が違うからかもしれない。地域に対する接し方や想定する将来的な変化の幅なども違ったりする。しかし、これらは今のところ住宅を設計するときに十分に考慮できてないと思います。それは設計者の勉強不足ではなくて、むしろ住んでる本人でさえあまり考えてなかったり、言語化できてなかったりするんです。住経験に基づいてつくればいい家ができるというよりは、振り返る機会をつくりましょうということが前提としてありますね。

8　詳しくは以下など参照。
『住経験論ノート（1）：住まいの経験を対象化するということ』（traverse 新建築学研究 no.19、pp.26-31、2018）

改修前のアパート VR 撮影

家のあり方の幅や選択肢は、たぶんものすごく多様なはずで、それこそ家を持たなくてもいいじゃないかという発想にも、自分の生活を振り返ることからたどり着きうると思います。個室がなくてもいいし、半分ぐらい外で生活するのだっていいという人がいてもおかしくない。多様な生活の仕方だとか、空間を体験していって、そういう生活をしたことがすごく楽しかったことをちゃんと自覚できれば、いろいろな生活を選ぶ選択肢が広がるだろうということを考えてるんですね。しかし一方で、住まいの経験を増やすのは、引っ越すのもお金がかかるし、なかなか動けない人もいるのでそんなに簡単ではないですよね。

そのなかで一番簡単にできるのは旅行することです。違う土地に行ってそこのゲストハウスでも民宿でもいいし、ホームステイできれば一番いいですけど、そういう違う文化の家で生活する経験をたくさん増やしていくと、その人が将来的に選べる家の幅が広がる。そして、そのような人が増えれば世の中にもっと面白い家が増えていくに違いないと考えています。そういう意味で、定住する社会の中に移動する生活が適度にあるということは、社会全体の生活や住まいの質をかなり上げることになるのではないか。今の話を聞いていて確信を持ちました。

目下、取り組んでるもう一つは、学生アパートを改修して自分の家にすることです。名古屋の大学に勤めている時に、ずっとここにいるだろうなと思って家を買ってフルリノベーションしたのですが、住み始めてすぐに京都に来ないかという話がきて。母校に戻れるという嬉しい話なんですけど ……。３年間頑張って単身赴任しながら住んだんですが、結局合わせて４年しか住めなかったんですね。３年前にそれを売って家族も京都に来て、今は借家暮らしなんですけど、そろそろちょっと落ち着く場所が欲しいなと思って昨年から家探しを始めました。

元学生アパートの外観（改修前）

家探しをしてあらためて感じたのは、なかなか住みたいと思う家がないことです。また、自分の価値観にフィットした借家とか貸アパートが各地で見つかるような状況があると、アドレスホッピングとまでいかなくとも、もっと気軽に移動しやすくなるんじゃないかということです。あるいは、自分で手を入れられればもっともっと良くなるのにという家があっても、今はなかなかそれが難しい。結局、同じようなマンションの中から立地・面積・築年で選ぶか、かなり古い貸家に運良く巡り合うかしかない。学生なら、

『住経験論ノート（2）：親の住経験をインタビューすること』（traverse 新建築学研究 no.20、pp.112-117、2020）
『住経験論ノート（3）：異文化の住経験に触れること－デルフト工科大学における試行』（traverse 新建築学研究 no.21、pp.112-119、2021）

元学生アパートでの解体ワークショップの様子

ほとんどがワンルーム以外の選択肢を持ててないですよね。

そんなことを考えながら探して１年経った頃、この 1975 年築の学生アパートに出会ったんですね。風呂なしでトイレ共同、流し共同で、ワンフロアに四畳半の部屋が６つある２階建ての建物です。接道条件を満たしていない再建築不可の建物なので、一戸建てくらいの値段で出ていました。これはもう見た瞬間に面白そうだなと思いました。面積が 140 平米ぐらいあって、うちは子ども３人の５人家族で 100 平米もあれば十分なので、少し大きすぎるのですが、２階で基本的に生活が完結するようにして、下のフロアは小部屋に分けたまま子ども部屋に使い、子供が独立したら１階を全部貸し出せるような設計を考えています。お店を入れたり、あるいは近くに芸術大学があるので、貸しアトリエにしたり、それこそ旅行者や留学生の一時居住の場にできたらいいと思っています。

## 移動生活におけるライフステージの変化と価値観の変化

――それでは鼎談に移らせていただきます。

**渡鳥**　市橋さんにお聞きしたいのは、アドレスホッピングを開始する前と後での価値観の変化、あるいは予期していなかったことなどはあったかということです。僕は移動することで様々な人と出会えることもバンライフのメリットと思っていましたが、八ヶ岳での場づくりを経験し、移動せずともそこに人が集まってくることに気づきました。そのような価値観の変化はありましたか。

**市橋**　最近､｢定住｣と｢所有｣と｢労働｣の３つはワンセットの価値観だなとふと思ったんですよ。逆に言うと、｢非定住｣｢非所有｣｢非労働｣はワンセットなんです。人間は約１万年前、農耕が始まったあたりから定住を始めて、その時に所有、労働という概念が生まれました。それ以前は、狩猟と採集が生活の主だったから１日数時間だけ働けば食べていけるし、皆が移動生活をしていたし、山や川は共有財なので、定住や所有という概念すらなかったと思うんです。僕自身、移動生活を始めたら仕事の仕方とか、物の所有に対する考え方がつられて変わりました。定職についてひとつの場所で働き、自分の財産を蓄えていくというような価値観ではなくなりましたし、ものに関していえば、本当に必要なものは限りなく少ない、ということも実感できました。これは、暮らし全体が農耕思考から狩猟思考に変わったからだと考えています。そこは想定外の変化でした。

また、結婚や出産というライフステージの変化からも大きな学びがありました。やっぱり家族が増えると、移動コストが上がるんですよね。金銭的な意味だけでなく、単純に子供がいると移動は大変ですし、お互い体力や気力にも差があります。行き先も全員で合意形成して決めないといけないし、時間もかかる。そうすると、これまでみたいに気の向くままに移動しまくるということは難しくなってきて、もう少しペースダウンして、じっくりその土地に向き合いながら、住む場所を変えていくというスタイルに変わってきました。数ヶ月間、その土地に住んでいると、地元の人たちと深く交流ができて、どうすればもっとその地域をよくできるかと考えるようになってくるんです。移動しているからこそできる役割があるんじゃないかな、と。

その一環として今、京都の浄土寺で活動を始めています。地域で長く活動されている方々と一緒に「ホホホ座浄土寺座」という社団法人を作って、地域福祉や空き家問題、食育や健康に関する取り組みなどを始めようとしています。移動生活をしてきた我々にしかつくれない価値を、地域コミュニティで生み出せたらいいなと思っています。人生のそれぞれのタイミングで生活スタイルが変わったことで、結果として訪れる土地との向き合い方が変わりましたね。

左京区浄土寺で活動する「ホホホ座浄土寺座」のメンバー

**渡鳥**　ありがとうございます。僕も結婚をきっかけに価値観が変わったというのは同じですし、バンライフを始めたのも離婚したときだったので、その考えには共感する部分があります。

**市橋**　移動する生活の中で、結婚生活が合意形成の連続であるということも再認識しました。定住をしてると、ある程度固定的な要素が多いのですが、移動をしてると日々が意思決定の連続だから、宿泊場所から移動方法から全部すり合わせていかないといけませんでした。幸い、考えてることもセンスもすごく近い人と一緒になれたからほぼすれ違いはないんですけど、最初は価値観をすり合わせるのがすごく大変でした。

**柳沢**　パートナーと一緒に移動することで運命共同体としての側面がより強まってしまうんですね。一人だと身軽だけれど、複数だと結束あるいは拘束の力がより強く作用する。それは確かにやってみないと分からないですね。

## 移動生活から見えてきた日本の住居の課題

――移動生活を通じて住居を決める際にどのようなことを考えるようになりましたか。

**市橋**　僕は「住居」を決めているという感覚はあんまりないんですよ。「住居」じゃなくて、「環境」を選択している感覚の方が強いです。今、自分はどういう環境で過ごせば生き生きするのか、自分にはどういう環境が必要かという観点で決めています。

今僕が浄土寺にいるのも、夫婦で食や健康に関する取り組みをしようと思ったときにすごく面白いエリアだと感じたからなんです。面白い飲食店も多いですし、ちょっと足をのばせば大原でいい食材を調達できますし、大文字山に登ったら野草やキノコが採れます。それに個人で表現活動を行っている人も多いです。そういう人とか町とか自然とか、環境から得るものがすごく多そうだなと思って、長く住みたいと思うようになりました。周囲の環境から何を感じ、何を得られるかが重要なんです。

――ジョニーさんはどうですか。

**渡鳥**　住居を決めるにあたって、日本の住居には柔軟性がないと感じています。日本の住居では、賃貸か持ち家の二択ですし、しかも賃貸だった場合には原状回復が求められるわけです。海外であれば、リノベーションして住まいに付加価値をつけることが文化として根付いていますが、日本は経年価値のある古民家すら壊してしまいますよね。勝手にリノベして価値ある空間に仕立てていくというのは、空き家時代には求められていくのではないでしょうか。

また、現在の一軒家の仕様だと、家族の人数の変化や、柳沢先生のような急な引っ越しなどライフスタイルやライフステージの変化に柔軟に対応できないですし、シェアハウ

ス暮らしの人だとか、あるいは結婚しない人だとか、人間や家族の関係性は複雑化してますよね。今まで住居では一人で暮らす、あるいは結婚して家族で暮らすという考え方しかなかったと思うんです。でも人間関係の多様化によって住居も多様化してよいはずですよね。暮らし方や働き方が新しくなり多様化しているのに住居としての建築がついていってないとも感じるので、その点でも柔軟な建築が現れて欲しいと思っています。逆に、建築をつくる側から多様化に対応する提案をして、生活スタイルを作っていくことも十分できると思うんですよ。

**柳沢**　僕たちが頑張らなきゃいけないですね。

**市橋**　これまでに実現されてうまくいった、土地に根付くかたちの柔軟性の高い建築はないのでしょうか。

**柳沢**　柔軟性のある建築は 20 世紀の初めぐらいからたくさん研究されてきたんですが、結論としてきちんと成功したものはあまりないと感じています。最近解体された中銀カプセルタワー[9]のように、大きなスケールではやはり難しいですね。小さなスケールで言うと、DIY やちょっとした改修でおおきな変更ができるという意味では、日本の木造住宅はすごく柔軟性が高いです。そのような木造住宅は日本にたくさんあるので、もう少し好き勝手にカスタマイズするのが当たり前な感覚になると、家の扱い方に対する発想の自由度が、つくる側・住む側のそれぞれで上がっていくんじゃないかなと思いますね。

**渡鳥**　海外についてはどうなんですか。

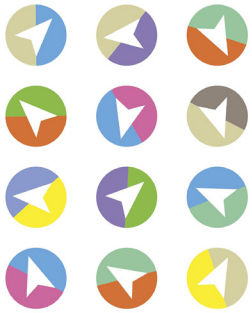
**柳沢**　私はインドや東南アジアの都市の旧市街地に行くことが多いんですけど、改修されていない家がほとんどありません。元の状態があまり良くないというのもあるんでしょうけど、一生のお金をはたいて買うというよりも、そのときに払えるお金で家を手に入れて、お金に余裕が出てきたら継ぎ足していくという家のつくり方をよく見ます。現在日本では家をもつということに対して、有り金をはたいて清水から飛び降りる覚悟でというイメージがありますが、本当はもっと気軽にできるべきだと思います。

## 移動と教育

——次に移動と教育についてお伺いしたいと思います。市橋さんは『Hopping Magazine』で教育について話されていて、柳沢先生も准教授という立場で教育に関わっておられます。移動しながら教育することに対しての考えや、定住と非定住における教育の違いについてお伺いしたいです。

**市橋**　『Hopping Magazine』のテーマが実は "Move to learn" というもので、移動と教育について様々なインタビューをしました。2 歳、4 歳ぐらいの就学前の子どもを連れながら移動生活をしている家族と話した時は、「子どもは自分が育てるものではなく勝手に育っていくもの。自分たちは環境だけ用意してあげればいい」と言っていました。海外の公園などで言葉が通じなくても、子どもは言葉の壁を超えて海外の子どもたちと仲良くなれるそうです。一方で、SANU というライフスタイルブランドを創業した本間貴裕さんに話を伺った時は、これから子どもたちが世界で何かをやっていくにはコミュニケーションスキルが最も重要になるとおっしゃっていました。異なる文化の人々と対等にコミュニケーションをとるスキルそのものが一番の武器になる。そのためには、文化固有の対話方式を学ぶ一方で、普遍的な対話方式、つまり、ディスカッションの進め方やコミュニケーションの方法論などをまず教えるべきで、そのさきに何を深めていくかは子どもたち次第でいいんじゃないかということでした。

Hopping
MAGAZINE



Hopping Magazine

9　黒川紀章が設計し、世界で初めて実用化されたカプセル型の集合住宅でメタボリズムの代表的作品である。一度もカプセルが交換されることなく 2022 年に解体された。

僕自身、子供と一緒に移動生活をしていくことを考えると、何をどういう形で教えるのが良いのか、既存の義務教育の枠組みを超えて考えなければならないと思っています。日本の教育に限界も感じていますし、これからは世界で活躍できる素地が必須とも思います。その中で、移動が寄与できる部分は多いと思いますし、「かわいい子には旅をさせろ」ではないですが、旅先から学ぶことは多くあります。実際、教育者としては、移動と教育の関係性にはどういった可能性を見出されますか。

**柳沢**　移動するということは、今いる環境とは違う環境に身を置くので、生活全般において経験の総量を増やすことになります。移動を伴った学習はとてもよい、というのが私の基本的な考えです。文化の違いから、それまで培ったコミュニケーションスキルが通用しないということもあるでしょう。でもこれに関しては、考える時のベースとなる言語をある程度安定した環境で学び、基礎を固めることができていれば、それが良い方向にはたらくのではないかと思います。移動と定住のどちらかを選ぶのではなく、定住してある程度安定した環境で学ぶ時間がありつつ、ある時は移動して異なる環境で学び、そしてある時は戻ってというのを繰り返すのが教育にとってもいいんだろうなと思います。

移動と教育の本質的な関係は、移動で環境が変わるとアンラーニング[10]がおこるということだと考えています。例えば今まで覚えてた自分のコミュニケーションスキルなどが通用しない環境に行くと、もう一回それを学び直さないといけない。その学び直しが大事なところだと。それが頻繁すぎてもよくないですが。

――今日における一般的な教育は移動を伴うという考え方が薄く、子どもが成年になるまでその土地から出ないこともしばしばだと思います。移動が定着していない今の社会において移動生活的要素を取り込むにはどういった変化が必要なのでしょうか。

**柳沢**　転校が単純に面倒くさいので、もう少し簡単に手続きができるようになればいいと思います。アドレスホッピングじゃないですが、転入とか編入がしやすい仕組みがあると自由度は上がるし、移動を伴う教育っていうのは考えやすくなるんじゃないでしょうか。

**渡鳥**　制度もそうですけど、移動を前提として色々学校を渡り歩いている人がマイノリティとして馴染めなくていじめられてしまうようなことが起きてると思うんです。でも、移動する人がマジョリティになったときにまた全然違う世界があるのかなと思っています。

僕もそもそもバンライフを始めた理由のひとつに教育があって、離婚した後に息子との面会で自分が彼にしてあげられることを考えたときに、月に一度一緒に旅をしていろいろな経験をさせたいと思ったんです。でもそのときに気付いたのは、彼にとっては、移動生活が非日常であるのに対して僕の中では日常だったんです。移動が日常になったときの世界と非日常のときの世界では、ものの受け取り方が違うのではと感じると同時に、どちらが良いのか現時点では判断できないと思いました。というのも、大人の環境に子どもを放り込むことが多いとストレスになる一方で、逆に子どもだらけの環境に子どもが行くことは割と自然にいけるんですよ。彼らは全然知らない子たちでもすぐ打ちとけて友達になることができるんです。子どもが多い環境だったら移動が日常になってもいろいろな教育体験はできるのではと思います。

## 移動生活をヒントに建築について考える

**渡鳥**　移動というテーマにおいて建築界で議論が不足していると感じる領域があるか改めて聞きたいです。

**柳沢**　一つは先ほどちょっと触れましたけど、もう少し移動頻度が少ない住み替えという行為についてです。移動と定住は対立するものではないし、意外と明確に区別できるものでもない。しかし、さあ引っ越そうと家を探すと選択肢が貧しい。一人暮らしでも、例えば土間や庭があって、そのかわり少し古くて手頃なものって今はなかなかない。

10　「学びほぐし」を意味し、これまでの学習を通じて培ってきた価値観や習慣を認識した上で、必要なものを取捨選択し、新しいものを取り入れながら学びを修正すること。

そういった選択肢を増やすことが必要だと思っているんですけど。

二つ目は、全く違う文化のところに移動しなければならないというときに、そこにどう馴染むかという問題です。例えば難民問題について社会的に解決が求められていますが、建築についても答えが出せてないですね。そういう問題についてもバンライフだったり、ホッピングの話にヒントがあるかもしれない。

**渡鳥**　僕は新しいテクノロジーをどう転用していくかというところに可能性があると思っています。黒川紀章が情報化社会においてホモ・モーベンスや動民と言った人々が現れると予見しましたが、半世紀経ってようやくそれが実現できる段階にきていると思います。しかし、新しいライフスタイルをつくるという視点で活動されている建築界隈の人はまだまだ少ない。建築の持つ力はそこにあるんじゃないかと思いますし、分野の境界にこだわらずにもっと外に出ていけばいいのにと思います。

**市橋**　まちや都市における体験自体の設計も「建築」の範疇になると思います。ずっとそこに住んでる人と移動民との出会いや、コラボレーションの設計という観点においてのまちづくりは結構面白いと思います。京都で 4 ヶ月くらい一緒にシェアハウスをしていた香港出身のアーティストが、引っ越す時に日本の家は探しにくいと言っていたんです。そのなかで「Sayonara Kyoto」という訪日外国人だけの Facebook コミュニティでは活発に情報交換がされていて、たまたまそこで家を募集したら、持ち家だけど使ってないから住まないかと融通してもらえたらしいんです。日本でもそういう特定のコミュニティの中で、柔軟なやりとりが行われる空間とか、建築物とかがもっとあっていいんじゃないかと思いました。それは別に海外の人だけの閉じたコミュニティじゃなくて、開かれたプラットホームで

あってもいいんじゃないかと思ったりもしています。そういう開かれた空間がまちの中にあると、そこが起点になって、新しいコミュニティが生まれたり、活動が生まれたりするんじゃないかなと期待しています。

**柳沢**　不動産屋さんに行かないと探せないのではなく、知り合い、友達の中で借りる、借りられるみたいな情報交換がもっとあるといいってことですね。

**市橋**　さすがに変な人が来るのは困りますが、ある程度価値観が共有できているコミュニティの中だったら大丈夫だと思うんですよね。そこでどう信頼を担保するかに課題がありそうな感じはしています。

## 定住と非定住の境界

――最後に、本鼎談につきまして、境界という言葉を聞いてどのようなことを考えられたかを伺いたいです。

**柳沢**　今日鼎談をするまでは移動と定住の違いについて考えていたんですけど、話を聞いてみて、線をしっかり引くというよりは、そこは曖昧でもいいから、移動的な生活と定住的な生活を横断したり、行ったり来たりすることがすごく大事であるということに気づきました。移動する暮らしそのものがいいというよりも、今までと違う環境に身を置くことによって得られる発想だとか、あるいは移動したことによって得られる新しい人間関係や情報だとか、移動による行動の自由度の拡大だとか、そういうところに価値があって、定住はそれを成熟させる環境なんだろうなと思いました。

そして、定住と非定住の両方があるのがいいということが今日の議論を通してとてもよく分かりました。お二人とも、ある時はかなり頻繁に移動してたのがある時には移動がゆっくりになったりとか、実は移動したくなかったとか、ライフステージによっても今は移動しなくてもいいというのが印象的でした。

**渡鳥**　選べるってことがいいですよね。

**市橋**　そもそも僕自身も、選択肢が無いのがおかしいという憤りから始めたことですから。移動生活が好きなんでしょとか、家をもたないことがいいと思ってるんでしょって言われるんですけど、そうではなくて、「暮らしに柔軟性をもつこと」が一番重要であって、そこさえ保てればどっちに振れようがいいんですね。今柳沢さんがおっしゃられたことと一緒でグラデーションが存在するので、定住と非定住のどちらかを0か100かで選ぶのではなく、その間のどのポイントをそのタイミングで選ぶかという考え方になればもう少し生きやすい世の中になると思っています。

**柳沢**　今日の話で、インドのバラモン教にある人生の4つの期間という概念を思い浮かべました。「四住期」と言って、一つ目は学生期。2つ目が家に入って子どもを育てたり、財産を蓄えたりする家住期。3つ目がそういうしがらみから一切離れて森の中で瞑想・修行にふける林住期。最後が死ぬ前に乞食遊行する遊行期です。移動する生活は、そのうち林住期に対応した生活スタイルかもしれないと思いました。つまり移動か定住かという選択というより、人生のある期間にそういう生活をするということに、意味があるのではないでしょうか。社会全体で見ると、定住を中心とした社会に外から新しい知識を導入したり、情報の循環や撹拌を促したり、そういう風通しをよくする役割を果たすのでしょうね。

**渡鳥**　今日は定住と非定住の境界について話してきましたが、僕は何らかの境界は現れてくるものだと思っています。そもそも人間は言葉にしなければ物事を認識できません。ですので、今の移動とか定住といった既存の分け方ではなく、弁証法的に新しい領域みたいなものが出てくるんだと思います。

だからずっとふわっとした言葉でやってきたことがいつか何らかの形で定義されることになると思っています。遊牧から定住への移行とともに地面に固定された建築が人類史に生まれたとして、今また遊牧に戻ると考えたときにそのような建築はいらなくなるのかというと、そうはならないでしょうし、だからこそ新しい領域が定義されて発展していく可能性があるのだと思います。ライフスタイルで言えばそれはもしかしたら移動と定住を合わせる「動住」の

ような言葉で括られるのかもしれない。僕らはずっとそういった新しい領域を模索し続けてる実践者なだけなんです。

渡鳥 ジョニー
ハイパー車上クリエイター。1980 年生まれ。千葉県出身。慶應義塾大学環境情報学部卒業。広告代理店での勤務、札幌国際芸術祭出展などを経て、「都市型バンライフ」を永田町にて実践。また、定額制コリビングサービス「LivingAnywhere Commons」八ヶ岳拠点にて、プロデューサー兼コミュニティーマネージャーを務めた。VLDK を通じた新たなライフスタイルの実装を目指す。2021 年より分散型ライフスタイルの普及を目指す U3 イノベーションズに参画。

市橋 正太郎
Address Hopper Inc. 代表。1987 年、兵庫県生まれ。京都大学経済学部卒業。株式会社サイバーエージェント、株式会社 mgram、WOTA 株式会社を経て 2019 年より現職。2017 年より非定住のライフスタイルを始め、「アドレスホッパー」と名付け広く発信。未来のライフスタイルの社会実装を目指す「FUTURE GATEWAY」の運営、移動式サウナ「Hoppin'SAUNA 」の開発、食や健康に関するプロダクト開発など幅広く活動する。

柳沢 究
京都大学大学院工学研究科建築学専攻准教授。博士（工学）／一級建築士。1975 年、神奈川県生まれ。京都大学大学院工学研究科修士課程修了。神戸芸術工科大学大学院助手、究建築研究室代表、名城大学理工学部建築学科准教授を経て現職。20 歳の頃に 1 年間のバックパッカー生活を経験。現在は、伝統的居住空間の現代的変容、時間的連続性のある空間更新、住経験という概念の確立・普及・設計への応用に関する研究に取り組んでいる。